

ロロ『Every Body feat.フランケンシュタイン』観劇レポート

匿名 (日本大学芸術学部 1年)

この作品との出会いは、一枚のフライヤーからだった。我喜屋位瑳務氏の描く怪物のポップな色合いに、自分の知らない怪物の存在が垣間見えたような気がして、気づくとチケットを手にしていた。ロロの演劇も、メアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』もどちらも見たことのない私にとって、初めての怪物との出会だった。

本作では、ライカとライカの周囲の3人の人間の姿を織り交ぜながら「それ」の存在を肯定していく。ライカの母であったスカート、ライカの友人であったページ、ライカの主催する詩作の会に参加していたシーナ、誰も皆、人を想い続けていた。スカートにとっての家族、ページにとってのパジャマ、シーナにとってのソテー。そんな彼らの想いを、ライカなりに受け止め、出来た存在が「それ」であり、周囲から見た“怪物”なのだろう。

観劇中、美しさが覆いかぶさってきたような感覚になった。ここで言う美しさは、劇空間全体の流麗さ、と言ってもいいだろう。薄暗い照明と、生活環境が作り込まれた廻り舞台。心地よい音楽が開演前から流れていた。舞台上から刻まれる言葉の美しさに、ずっとずっと息を吞まれていた。何より、舞台上に「それ」がいる時の動きに釘付けになった。スカート、ページ、シーナが渾然一体となって蠢いていた。紛れもない怪物の誕生を目撃した。なのに、目の前の存在を脳内でうまく消化できないような、そんな感覚だった。目では3人の人間と認識しているのに、脳内では一塊の存在に見えた。見ているものと頭の中が別物に感じることは初めてで、少しおぞましくもあったが、それを上回る生のパワーに圧倒された。この瞬間を美しいと形容せずにはいられない、と思った。

本作のホームページには、「怪物」について、死者をパッチワークしながら生きる、という記述がなされていた。死者の想いを原動力に蠢く「それ」の存在はどんな生き物たちよりも生きることに必死で、美しく輝き続けていた。

他にも色々な感情が現出したが、文字に起こそうとすると手から実像が零れ落ちてしまうような感じがして、うまく書くことが出来ない。これは自身のアウトプットの経験不足に起因するものだ。日芸という恵まれた環境にいる以上、思いを文字に、言葉に変換する技術が必要だ、とこの感想文を書きながら痛感している。自分の弱点までも見出すことが出来た今回のプログラムは非常に有意義なものだった。

これにて、ロロ『Everybody feat.フランケンシュタイン』による私の感想のパッチワークを終了したい。

講評 中野成樹（演出家/中野成樹＋フランケンズ主宰/日本大学芸術学部演劇学科准教授）

レポート、ありがとうございます。まずは、ライカ - スカート、ページ、シーナ - 家族、パジャマ、ソテー の関係をよく整理しています。また、「それ」のあり方も、=周囲から見た怪物である、とスマートに捉えている。その上で、その実在に、つまりはその演劇表現に「美しさ」を感じた。とはいえ、あなた自身、まだ自身の感じた美しさの正体をうまく言語化できてはいないのでしょうか。ならば、「この感覚」にさらなる言葉を与えてゆくことが、あなたの未来の演劇を構築する大切な要素になるかと思います。期待しています。